

## エレミヤ書29－33章22節 「幸せな約束」

### 1A バビロンに捕え移された者たち 29

#### 1B 七十年後の帰還 1－14

##### 1C 定着への勧め 1－9

##### 2C 良い目的 10－14

#### 2B バビロンにいる偽預言者 15－32

##### 1C 残された者たちの悲惨 15－20

##### 2C 恥ずべき事 21－23

##### 3C 迫害 24－32

### 2A 終わりの日の救い 30

#### 1B 捕えた国々の滅び 1－11

#### 2B 懲らしめの後の救い 12－17

#### 3B 廃墟の立て直し 18－24

### 3A 永遠の愛 31

#### 1B 喜びの声 1－14

##### 1C イスラエルの地の建て直し 1－6

##### 2C 北の果てからの帰還 7－14

#### 2B 嘆きへの報い 15－22

## 本文

エレミヤ書 29 章を開いてください。エレミヤ書の通読の学びは、ついに台風の中の目のような所に入ります。これまでは、神がエルサレムに怒りを示し、バビロンによって滅ぼすという宣言を読んできました。けれども、神のご計画はそれが目的ではありません。バビロンに捕え移された民の子孫をエルサレムに連れ戻すことによって、ご自分の憐れみを示すという目的があります。約束の地に入って来て以来、彼らがカナン人の偶像に仕え、そこから離れることがなく、エゼキエル書を読むと詳しく書いてありますが、実に神殿の中にまで偶像が持ち込まれていく中で、主はその偶像から民が離れることができるように、大掃除を行なわれます。新しくするために、古いものを滅ぼすというのが、バビロン捕囚の目的です。29 章と 30 章から 33 章までが、その神の幸いなご計画がはっきりと示されている箇所です。30 章から 33 章までは、バビロンからエルサレムへの帰還のみならず、終わりの日における世界離散からユダヤ人が帰還する、イスラエルの救いの完成の幻も見ることになります。

### 1A バビロンに捕え移された者たち 29

29 章は、午前礼拝でお話したように、偽預言者との確執になっています。偽預言者が、エルサレムのみならず、捕え移されたバビロンの地においても、その捕囚の民の中に偽預言者がいまし

た。バビロンは、速やかに滅ぼされ、あなたがたは帰還するのだと言っている者たちが捕囚の民の間にもいました。それでエレミヤは、人に託して預言の言葉を捕囚の民にも届けるのです。

#### 1B 七十年後の帰還 1-14

#### 1C 定着への勧め 1-9

29:1 預言者エレミヤは、ネブカデネザルがエルサレムからバビロンへ引いて行った捕囚の民、長老たちで生き残っている者たち、祭司たち、預言者たち、およびすべての民に、エルサレムから手紙を送ったが、そのことばは次のとおりである。29:2 ..これは、エコヌヤ王と王母と宦官たち、ユダとエルサレムの貴族たち、職人と鍛冶屋たちが、エルサレムを出て後、29:3 ユダの王ゼデキヤがバビロンの王ネブカデネザルのもとに、バビロンへ遣わした、シャファンの子エルアサとヒルキヤの子ゲマルヤの手に託したもので、次のように言っている。..

バビロン捕囚は主に、三回ありました。第一次捕囚は、紀元前 605 年で王族の者たちが捕え移されました(ダニエル 1:1)。ダニエルや友人が捕え移されたのはその時です。そして第二次は、597 年です。ここに書いてあるのがそれで、王エコヌヤ(エホヤキン)と王母、そしてバビロンにおいて建築事業に関わらせるためでしょう、職人と鍛冶屋が捕え移されました。そして第三次が、586 年です。この時に全ての民が捕え移されました。ごくわずかに、土地が荒れるのを防ぐために貧しい農民が取り残されましたが。第二次捕囚の後、ネブカデネザルは傀儡としてゼデキヤを王とさせ、属国にしました。けれども、バビロンの枷を解きたいとユダの民も、また周辺の国々も思っていたのです。そしてその願いをそのまま、神の名を使って預言していたのが、ハナヌヤであったり、他の多くの偽預言者でした。

そして、エレミヤは手紙を、「シャファンの子エルアサとヒルキヤの子ゲマルヤの手に託した」とあります。シャファンは、書記でヨシヤ王に仕えていた人で、神の宮で見つかった律法の巻き物を王に読み聞かせた人です。その息子の一人、アヒカムはエレミヤが殺されないように匿ったことがあります(26:24)。この二人も、エレミヤの言葉を神からのものとして受け入れて、神を恐れていたことでしょう。王の取り巻きにも、主を恐れる人々がこのように一部にいたことが分かります。イエス様の時にも、十字架をずっと見ていたローマの百人隊長は、「この方は神の子であった。」と証言しましたし、アリマタヤのヨセフやニコデモというユダヤ人指導者もいました。

29:4 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「エルサレムからバビロンへわたしが引いて行かせたすべての捕囚の民に。29:5 家を建てて住みつき、畑を作って、その実を食べよ。29:6 妻をめぐって、息子、娘を生み、あなたがたの息子には妻をめぐり、娘には夫を与えて、息子、娘を産ませ、そこでふえよ。滅つてはならない。29:7 わたしがあなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。その繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。」29:8 まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「あなたがたのうちにいる預言者たちや、占い師たちにごまかされるな。あなたがたが夢を見させている、あなたがたの夢見る者の言うこと

を聞くな。29:9 なぜなら、彼らはわたしの名を使って偽りをあなたがたに預言しているのであって、わたしが彼らを遣わしたのではないからだ。・・主の御告げ。・・」

捕え移された先の生活について指導しています。これは、へりくだった姿とも言えるし、御霊による導きと言い換えてもいいでしょう。主がなされていること、この場合は捕囚ですが、その力強い御手の下でへりくだれば、主がちょうどよい時に顧みてくださり、引き上げてくださいます。そして肉については、自分たちを救おう、自分自身を失ってはいけないという頑張りが、エルサレムにいる人々には、まだありました。しかし、それが取られてしまって、腑抜けにされてしまったのが捕囚の人々であります。ですから、低められた人々です。しかし、主はそのようなところに幸いのご計画を置いておられます。何もかも取られてしまったからこそ、真実に神に向かうことができます。御霊に従うことができます。

そして偽預言者の存在を上げています。彼ら中には預言者の形態さえ取らず、占いや夢見までもが、ヤハウエの名を使って将来を予想していました。まともそうに見えて、偽預言を語るものもいれば、明らかに世的なのに、同じことを語っている人々もいたわけです。教会において、説教壇から語られることが、実はご利益的な占い師が言っていることとあまり変わらない、ということがあるでしょう。また、流行っている政治運動、経済評論家、社会の専門家など、世の知者と言っていることが変わらないということがあるでしょう。

#### 2C 良い目的 10-14

29:10 まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。29:11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。・・主の御告げ。・・それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。29:12 あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。29:13 もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。29:14 わたしはあなたがたに見つけられる。・・主の御告げ。・・わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。・・主の御告げ。・・わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

主が、一見バビロンに妥協しているのではないかと思われる言葉を持っておられたのは、その理由は「七十年」という長い期間にありました。そうしたら、彼らをエルサレムに帰還させると計画しておられたので、バビロンにおいて生活を定着させ、その国の繁栄を祈りなさいと命じられていました。午前礼拝でもお話ししましたが、やはり大事なものは、「よく知っている」という言葉です。主はご自分のなされることについて、よく知っておられます。もっと人間的な言い方をしますと、「任せとけ！」であります。ここに出てくる「幸い」という言葉、ヘブル語で「トブ」であり、「良い」という意

味です。創世記の天地創造において、「これをよしとされた」の「よし」と同じ言葉であり、神の善を表す言葉です。主が、この七十年によって新たな創造をされるぐらいの、神ご自身の新たな決意のようなお気持ち、ここに含まれています。問題の渦中にいる者にとっては、霧で何も見えないようなもどかしさを感じるのですが、主は必ずそこにいてくださっています。だから、熱心に主を求めていけば、必ず御声を聞くことができます。

ところで、このことを実行していた人がいました。ダニエルです。6 章に、「6:10・・彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。・・彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。」とあります。ソロモンがかつて、囚われたところでエルサレムに向かって祈るならば、主がその祈りを聞いてくださいと祈りましたが、そのように祈っていました。またこれは、エレミヤによって主が語られたことの実践でもあったのです。9 章には、エレミヤの預言から捕囚の期間が 70 年であることを知り、間もなくユダヤ人が帰還することを知りました。それで長い、祈りを捧げています。

## 2B バビロンにいる偽預言者 15-32

### 1C 残された者たちの悲惨 15-20

29:15 あなたがたは、「主は私たちのために、バビロンでも預言者を起こされた。」と言っているが、29:16 まことに、主は、ダビデの王座に着いている王と、この町に住んでいるすべての民と、捕囚としてあなたがたといっしょに出て行かなかったあなたがたの兄弟について、こう仰せられる。29:17 万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らの中に、剣とききんと疫病を送り、彼らを悪くて食べられない割れたいちじくのようにする。29:18 わたしは剣とききんと疫病で彼らを追い、彼らを、地のすべての王国のおののきとし、わたしが彼らを追い散らしたすべての国の間で、のろいとし、恐怖とし、あざけりとし、そしりとする。29:19 彼らがわたしのことばを聞かなかったからだ。・・主の御告げ。・・わたしが彼らにわたしのしもべである預言者たちを早くからたびたび送ったのに、あなたがたが聞かなかったからだ。・・主の御告げ。・・29:20 わたしがエルサレムからバビロンへ送ったすべての捕囚の民よ。主のことばを聞け。」

捕囚の民の間で、偽預言者たちについて彼らを受け入れる声があったようです。それで、エレミヤが戒めています。「彼らを悪くて食べられない割れたいちじくのようにする。」と主は言われていますが、これは既に 24 章で、エレミヤが見た幻の中にありました。捕えられた人々のほうが、良い無花果の籠であり、エルサレムにいる者たちのほうが、悪くて食べられない無花果の籠です。

主が、なぜ彼らに災いを下されるのか？ はっきりと、「彼らがわたしのことばを聞かなかったからだ。」と言われます。我々人間は、災いが来るのかどうかという物差しで事の善悪を測ります。偽預言者はその災いが近づくことはないということを、強調していました。しかし、本来なら注目しなければいけないのは、神の言葉に聞き従っているのかどうかを試されなければいけないことです。その不従順について、主は時に、災いを近づけることによって私たちの心を揺るがします。そして

神に立ち返ることができるようにされます。

### 2C 恥ずべき事 21-23

29:21 イスラエルの神、万軍の主は、わたしの名によってあなたがたに偽りを預言している者であるコラヤの子アハブと、マアセヤの子ゼデキヤについて、こう仰せられる。「見よ。わたしは彼らを、バビロンの王ネブカデレザルの手に渡す。彼はあなたがたの目の前で、彼らを打ち殺す。29:22 バビロンにいるユダの捕囚の民はみな、のろうときに彼らの名を使い、『主がおまえをバビロンの王が火で焼いたゼデキヤやアハブのようにされるように。』と言うようになる。29:23 それは、彼らがイスラエルのうちで、恥ずべきことを行ない、隣人の妻たちと姦通し、わたしの命じもしなかった偽りのことばをわたしの名によって語ったからである。わたしはそれを知っており、その証人である。…主の御告げ。…」

バビロンにいた偽預言者について、主は、具体名を挙げて、彼らが偽預言の印となることを教えられました。「アハブとゼデキヤ」です。彼らが、ネブカデネザルによって火で焼かれます。覚えていませんか、ダニエル書 3 章において、ダニエルの友人三人は、ネブカデネザルの造った像の前でひれ伏さなかったので、燃える火の炉に投げ入れられました。しかし、主は火の中で御子を置いてくださり、三人は無傷で火から出てきました。このように、ネブカデネザルの権威に逆らう者たちは、火あぶりの刑に処せられました。主が彼らを救われたのです。けれども、この二人については、守りの手を置かれましたが、ネブカデネザルのするままにさせたのです。このようにして、バビロンにいる者たちに、彼らの語っていることが偽預言であることを確かにさせたのです。

そして偽預言者は、ただその語っている言葉が間違っているという教えについての逸脱だけに終わらない場合が多いです。主の聖めに預かるという健全さを失っているのです。宗教的なことさえ自分の欲や利得の手段としていくのです。彼らについては、女性問題がありました。今、テモテ第二の手紙を学んでいます。そこでも家々を回って、女たちをたぶらかしている偽教師たちの姿が出てきます。

### 3C 迫害 24-32

29:24 あなたはネヘラム人シェマヤに次のように言わなければならない。29:25 「イスラエルの神、万軍の主は、次のように仰せられる。あなたは、あなたの名によって、エルサレムにいるすべての民と、マアセヤの子、祭司ゼパニヤ、および、すべての祭司に次のような手紙を送った。29:26 『主は、祭司エホヤダの代わりに、あなたを祭司とされましたが、それは、あなたを主の宮の監督者に任じて、すべて狂って預言をする者に備え、そういう者に足かせや、首かせをはめるためでした。29:27 それなのに、なぜ、今あなたは、あなたがたに預言しているアナトテ人エレミヤを責めないのですか。29:28 それで、彼はバビロンの私たちのところに使いをよこして、それは長く続く。家を建てて住みつき、畑を作ってその実を食べなさいと、言わせたのです。』」

偽預言者シェマヤの罪は、迫害でした。彼もバビロンにいる一人でしたが、エレミヤがこんな手紙を送って来たから、彼を捕えるようにという手紙を送ったと言っています。エレミヤが、「狂って預言をする者」としています。そうです、人間的には狂っていることでしょう。まだ降伏していないのに、あたかも降伏しているかのような命令を神が行なっておられると言われるのですから。

29:29 ..祭司ゼパニヤがこの手紙を預言者エレミヤに読んで聞かせたとき、29:30 エレミヤに次のような主のことばがあった。..29:31 「すべての捕囚の民に言い送れ。主はネヘラム人シェマヤにこう仰せられる。わたしはシェマヤを遣わさなかったのに、シェマヤがあなたがたに預言し、あなたがたを偽りに抛り頼ませた。29:32 それゆえ、主はこう仰せられる。『見よ。わたしはネヘラム人シェマヤと、その子孫とを罰する。彼に属する者で、だれもこの民の中に住んで、わたしがわたしの民に行なおうとしている良いことを見る者はいない。..主の御告げ。..彼が主に対する反逆をそそのかしたからである。』」

シェマヤも、その子孫も、主が良いことを行なわれる、つまりエルサレムに帰還するという恵みを目撃することはない、ということです。これは大事な視点です。自分たちが信じなければ、そのことは起こらないという考えがあります。信仰によって、と言っていますが、実はそれは信仰ではなく積極的思考とも言えるでしょう。信じれば事実となるのではなく、事実があって、それを信じることによって、自分もその恵みに預かれるということでもあります。

## **2A 終わりの日の救い 30**

そして 30 章から 31 章全体に、主の大きな言葉、終わりの日に成し遂げてくださるイスラエルの救いの幻をお見せになります。

### **1B 捕えた国々の滅び 1-11**

30:1 主からエレミヤにあったみことばは、次のとおりである。30:2 イスラエルの神、主はこう仰せられる。「わたしがあなたに語ったことばをみな、書物に書きしるせ。30:3 見よ。その日が来る。..主の御告げ。..その日、わたしは、わたしの民イスラエルとユダの捕われ人を帰らせると、主は言う。わたしは彼らをその先祖たちに与えた地に帰らせる。彼らはそれを所有する。」

エレミヤは、七十年後にユダヤ人がエルサレムに戻ってくるという神の預言を語っていましたが、もっと大きな規模で起こる最終的なユダヤ人の帰還を見ます。「その日」とありますが、イザヤ書にも数多く出てきました。これは神が最終的に完成してくださる計画、終わりの日に行なってくださることを示す表現です。そして「イスラエルとユダの捕われ人を帰らせる」つまり、南ユダの民だけではなく北イスラエルを含む、すべての民、イスラエル全体の帰還についてです。

そしてこれをエレミヤは、夢の中で見たようです。31 章 26 節に、「ここで、私は目ざめて、見渡した。私の眠りはここちよかった。」とあります。将来と希望を与える夢、これを見て眠りが心地よか

ったと言っています。そしてこれを書物として書き記せ、夢で終わらせてしまうのではなく、わたしの啓示として書き記せと今、神がエレミヤに命じておられるのです。

30:4 主がイスラエルとユダについて語られたことは次のとおりである。30:5 まことに主はこう仰せられる。「おののきの声を、われわれは聞いた。恐怖があつて平安はない。30:6 男が子を産めるか、さあ、尋ねてみよ。わたしが見るのに、なぜ、男がみな、産婦のように腰に手を当てているのか。なぜ、みな顔が青く変わっているのか。30:7 ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。

とてつもない苦難を、産婦でもないのに腰を当てて苦しんでいることによって表現しています。これを「ヤコブにも苦難の時」つまり、イスラエルの民、ユダヤ人にとっての苦しみの時であると言っています。聖書には「主の日」という日、終わりの日に起こる大患難について数多く預言しています(例:イザヤ 13:6-8)。それは地上にいる諸国の民に襲いかかる患難ですが、ユダヤ人には特別な意味をもって、特別な取り扱いとして襲ってくることを聖書では預言しています。イエス様が「大患難の始まりについて語られる時、「ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。…あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。(マタイ 24:16,20)」と言われました。そして、その選ばれた者たちを主が再臨される時に救ってくださると約束しておられます。

30:8 その日になると、万軍の主の御告げ。わたしは彼らの首のくびきを砕き、彼らのなわめを解く。他国人は二度と彼らを奴隷にしない。30:9 彼らは彼らの神、主と、わたしが彼らのために立てる彼らの王ダビデに仕えよう。

ユダヤ人の離散の歴史は、バビロン捕囚から始まりました。彼らはペルシヤ時代にエルサレムへ帰還することができ、また自治を許されましたが、かつてのようにユダヤ人を王とする主権国家ではなかったのです。今でこそイスラエルは主権を取り戻しましたが、それでも彼らは大国の意向にいつも聞き従わなければいけない弱い立場にいます。しかし、このようなくびきや縄目を神が解くという約束です。そして確かに、あなたがたの王ダビデを立てるという約束です。この「ダビデ」が、実際にダビデが復活して彼らを支配するのか、それともダビデに神が約束された「世継ぎの子」、メシヤを表しているのか、聖書教師、聖書学者によって意見が分かれます。私は、おそらくメシヤではないかと思います。御使いガブリエルが、イエス様をみごもるマリヤに告げました。「また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。(ルカ 1:32-33)」

30:10 わたしのしもべヤコブよ。恐れるな。主の御告げ。イスラエルよ。おののくな。見よ。わたしが、あなたを遠くから、あなたの子孫を捕囚の地から、救うからだ。ヤコブは帰って来て、平穩に安らかに生き、おびえさせる者はだれもない。30:11 わたしがあなたとともにいて、主の御告げ。あなたを救うからだ。わたしは、あなたを散らした先のすべての国々を滅ぼし尽くすから

だ。しかし、わたしはあなたを滅ぼし尽くさない。公義によって、あなたを懲らしめ、あなたを罰せずにおくことは決してないが。」

主が、それらユダヤ人を虐げ、虜にしてきた国々を打ち砕くことによって、救いを彼らにもたらされます。終わりの日は、ユダヤ人が反キリストの率いる軍隊によって、世界の軍隊によって滅びる危機から救ってくださいます。ユダヤ人にとっての救いは、このように神に敵対する者どもをキリストが滅ぼされて、そして神が王として君臨されるエルサレムに戻るということを意味していました。私たちキリスト者にとっての救いは、霊的な勢力である悪魔や悪霊どもをキリストが滅ぼされ、それによって罪の縄目から解き放たれ、神に仕え、礼拝できるようにして下さったということです。

そして、国々に対する神の取り扱いと、彼らに対する取り扱いが違うことに気づいてください。国々は、滅びし尽くすという言葉が使われていますが、ユダの民に対しては、「しかし、わたしはあなたを滅ぼし尽くさない。公義によって、あなたを懲らしめ、あなたを罰せずにおくことは決してないが。」という言葉が使われています。これが、午前礼拝でも話しましたが「懲らしめ」であります。悪から離れることができるようにするため、むしろ悪から彼らが離れて、罪に定められることのないようにするために、神が取り扱われることです。神の契約の民は、このようにして懲らしめられても、罰せられることはありません。「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。(1コリント 11:31-32)」

## 2B 懲らしめの後の救い 12-17

30:12 まことに主はこう仰せられる。「あなたの傷はいやしにくく、あなたの打ち傷は痛んでいる。  
30:13 あなたの訴えを弁護する者もなく、はれものに薬をつけて、あなたをいやす者もない。  
30:14 あなたの恋人はみな、あなたを忘れ、あなたを尋ねようとしなない。わたしが、敵を打つようにあなたを打ち、ひどい懲らしめをしたからだ。あなたの咎が大きく、あなたの罪が重いために。  
30:15 なぜ、あなたは自分の傷のために叫ぶのか。あなたの痛みは直らないのか。あなたの咎が大きく、あなたの罪が重いため、わたしはこれらの事を、あなたにしたのだ。

ユダの民は、どのようなことをしても癒されませんでした。弁護してくれる者はおらず、癒す者はおらず、そして恋人は忘れます。なぜか？彼らが罪を犯して、それを悔い改めていないからなのです。聖書は絶えず、私たちの根本問題は罪であるとしています。神に対する反逆であるとしています。その根っこの問題に取り組むのではなく、自分の受けている傷を神以外のところで癒されようとするのが、私たち人間の姿です。主は、私たちが悔い改めるところまで、決してその御手を私たちから離すことはないのです。

30:16 しかし、あなたを食う者はみな、かえって食われ、あなたの敵はみな、とりことなって行き、あなたから略奪した者は、略奪され、あなたをかすめ奪った者は、わたしがみな獲物として与える。

30:17 わたしがあなたの傷を直し、あなたの打ち傷をいやすからだ。・・主の御告げ。・・あなたが、捨てられた女、だれも尋ねて来ないシオン、と呼ばれたからだ。」

主が傷を癒さないと決められている時は、決して癒されません。しかし同じように、癒すとお決めになる時は、どんなにその傷が酷くても必ず癒してくださいます。自分は立ち直れないと思っていたても、ここには、略奪した者がいて、虜とした者がいて、彼らがどんなに強くても主が彼らに報いてくださいます。その慰めは、主イエス様によって実現しました。38年足の利かない男が、「直りたいか」とイエス様に尋ねられて、「直りたい」と言わずに、なぜ癒されないかの説明をくどくど話していましたが、主は彼を直し、立たせてくださったのです。主は、罪を赦すと宣言されたら、赦されるのです。ぜひ、罪の告白を神の前でしてください、主はどんなに酷い罪でも、神の権能をもって赦すと宣言してくださいます。

### 3B 廃墟の立て直し 18-24

30:18 主はこう仰せられる。「見よ。わたしはヤコブの天幕の捕われ人を帰らせ、その住まいをあわれもう。町はその廃墟の上に建て直され、宮殿は、その定められている所に建つ。30:19 彼らの中から、感謝と、喜び笑う声がわき出る。わたしは人をふやして減らさず、彼らを尊くして、軽んじられないようにする。30:20 その子たちは昔のようになり、その会衆はわたしの前で堅く立てられる。わたしはこれを圧迫する者をみな罰する。30:21 その権力者は、彼らのうちのひとり、その支配者はその中から出る。わたしは彼を近づけ、彼はわたしに近づく。わたしに近づくためにいのちをかける者は、いったいだれなのか。・・主の御告げ。・・30:22 あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。」

エルサレムの再建の幻です。まず、これまでは「天幕」でありました。自分たちの土地から離れたところで生活していましたが、そこは故郷ではありません。けれどもエルサレムでは「住まい」を設けることができます。同じように、私たちの今の肉体をパウロは「幕屋」と呼び、復活の体を「建物」と例えましたね。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。(2コリント 5:1-2)」

そして喜びと笑いが、町の中で溢れます。これが救いを受けた者たちの特徴です。ゼパニヤ書では、シオンの都にいる者たちが喜び歌っているだけでなく、主ご自身が喜び楽しみ、歌までうたっておられます！「3:17 あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。」私たちの魂は、このように喜びと楽しみに満ちているでしょうか？これが、救いを受けた魂の状態です。それから、彼らの上に立てられる権力者は異邦人ではなく、神を知っている同胞の民からであり、そして彼は神のところに近づきます。キリストを知っている者が、キリストに近づきながら治めるという統治こそが、神が教会に対して持つておられる統治であり、将来の御国

における統治です。それから 22 節で、「あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。」とあり、これが個人的な、人格のある交わりをすることができる、新しい契約です。

30:23 見よ。主の暴風、..憤り。..吹きつける暴風が起こり、悪者の頭上にうずを巻く。30:24 主の燃える怒りは、御心の思うところを行なって、成し遂げるまで去ることはない。終わりの日に、あなたがたはそれを悟ろう。

大患難の終わりの時に、主が徹底的に悪者を滅ぼされます。そのことを残されたイスラエルの民は目撃することになります。

### **3A 永遠の愛 31**

#### **1B 喜びの声 1-14**

#### **1C イスラエルの地の建て直し 1-6**

31:1 「その時、..主の御告げ。..わたしはイスラエルのすべての部族の神となり、彼らはわたしの民となる。」31:2 主はこう仰せられる。「剣を免れて生き残った民は荒野で恵みを得た。イスラエルよ。出て行って休みを得よ。」

「剣を免れて生き残った民」とあります。この大患難において彼らの多くは殺されます。ゼカリヤ書 13 章によると「三分の二」は断たれます(8 節)。さらに「荒野で恵みを得た」とありますが、これは反キリストが神殿で自分が神であると宣言してから、ユダヤ地方から逃げたからです。ユダの荒野へ逃げ、そしてイザヤ書 63 章、ダニエル書 11 章などによると、エドムの地ボツラ、今のヨルダンのペトラに逃げると考えられます。そこで彼らは恵みを得ます。主が戻ってこられて、彼らの敵に戦われます。

そしてここに「イスラエルのすべての部族の神」と、すべての部族が強調されています。これから「エフライム」の名が何回も出てきますが、それは北イスラエルを代表する部族です。南ユダだけではなく、北イスラエルも含めた全てのイスラエルへの約束です。これまでエレミヤは、ユダに対する預言を行ってきましたが、主は決してイスラエルを忘れておられません。そして、この二つが一つになることは神の御心です。

31:3 主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。

すばらしいです、「永遠の愛」です。これはとても聞こえがよいものですが、その本当の姿を見るならば、遠ざかる人々が大勢いるでしょう。永遠の愛は、イスラエルに対して示されました。一時的な愛ではないので、多くの期間、彼らが苦しみに遭うこともありました。永遠の視点から愛しておられるので、一時的な悲しみや苦しみを許されることもあるのです。主が永遠の視点から良かれと

思われることを行なわれます。そして愛してくださっています。

そしてその間、「誠実を尽くし続けた。」と言われます。たとえ誠実に見えないような時でも、実は日々、神の慈しみは注がれていました。エレミヤが哀歌を書きましたが、エルサレムが悲惨な状態になっている時に嘆いていましたが、その嘆いている自分が生きていることに、はたと気づきました。それでこう言います。「哀歌 3:22-23 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。」

30 章から 33 章までの箇所、主はイスラエルとユダを決して見捨てないことを強調されています。どんなことがあっても、捨てられているように見えても捨てられていません。ですから、今もイスラエル人は生きていますし、彼らは愛されている民であります。そして終わりの日に国民的にイエスを自分のメシヤとして受け入れます。この永遠の愛に、私たち異邦人もキリストにあって接ぎ木されているのです。

31:4 おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。再びあなたはタンバリンで身を飾り、喜び笑う者たちの踊りの輪に出て行こう。31:5 再びあなたはサマリヤの山々にぶどう畑を作り、植える者たちは植えて、その実を食べることができる。31:6 エフライムの山では見張る者たちが、『さあ、シオンに上って、私たちの神、主のもとに行こう。』と呼ばわる日が来るからだ。」

エルサレムが回復します。先ほどのように喜び楽しみ、また踊るのですが、北イスラエルのサマリヤ地方も回復される様子が強調されています。その土地から作物が育ち、そして何よりも彼らがシオンに行って主を礼拝するようになる、というのです。ヤロブアムがベテルとダンに金の子牛の祭壇を築いた時以来のことになります。彼らもまた、主に立ち返り、エルサレムで礼拝します。

#### 2C 北の果てからの帰還 7-14

31:7 まことに主はこう仰せられる。「ヤコブのために喜び歌え。国々のかしらのために叫べ。告げ知らせ、賛美して、言え。『主よ。あなたの民を救ってください。イスラエルの残りの者を。』31:8 見よ。わたしは彼らを北の国から連れ出し、地の果てから彼らを集める。その中にはめしいも足なえも、妊婦も産婦も共にいる。彼らは大集団をなして、ここに帰る。31:9 彼らは泣きながらやって来る。わたしは彼らを、慰めながら連れ戻す。わたしは彼らを、水の流れのほとりに導き、彼らは平らな道を歩いて、つまづかない。わたしはイスラエルの父となろう。エフライムはわたしの長子だから。」31:10 諸国の民よ。主のことばを聞け。遠くの島々に告げ知らせて言え。「イスラエルを散らした者がこれを集め、牧者が群れを飼うように、これを守る。」と。31:11 主はヤコブを贖い、ヤコブより強い者の手から、これを買い戻されたからだ。

イスラエルに帰還した者たちがさらに、まだ散っている者たちが戻ってくるように主に願っていま

す。すると、北の国から主が連れ出してくださる、とあります。エゼキエル 38-39 章には、神がマゴグの地のゴグとそれに連合する国々を打ち砕かれる預言があります。マゴグは、イスラエルから見て北の果てにある国々です。そこから大勢の人々がやって来ます。しかも、障害を持っている人々、妊婦や産婦のような移動することの難しい人々までがきます。そこには、主の力強い贖いの手が背後にあります。今、その予兆とも言えるべき出来事が進行中です。現代のイスラエルは、ロシアや東欧からの帰還民の移住によって始まりました。そして、ソ連邦が崩壊してから、そこにいたユダヤ人が大量に移住してきました。

31:12 彼らは来て、シオンの丘で喜び歌い、穀物と新しいぶどう酒とオリーブ油と、羊の子、牛の子とに対する主の恵みに喜び輝く。彼らのたましいは潤った園のようになり、もう再び、しばむことはない。31:13 そのとき、若い女は踊って楽しみ、若い男も年寄りも共に楽しむ。「わたしは彼らの悲しみを喜びに変え、彼らの憂いを慰め、楽しませる。31:14 また祭司のたましいを髓で飽かせ、わたしの民は、わたしの恵みに満ち足りる。…主の御告げ。…」

彼らは爆発的な喜びに満ちています。主の恵みに触れているからです。主の恵みは、私たちは語りつくすことができません。全く受けるに値しない祝福を受けるようにしてくださいました。

## 2B 嘆きへの報い 15-22

31:15 主はこう仰せられる。「聞け。ラマで聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声。ラケルがその子らのために泣いている。慰められることを拒んで。子らがいなくなったので、その子らのために泣いている。」31:16 主はこう仰せられる。「あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。…主の御告げ。…彼らは敵の国から帰って来る。31:17 あなたの将来には望みがある。…主の御告げ。…あなたの子らは自分の国に帰って来る。

「ラケル」はヤコブの妻です。ラケルがヨセフを産んだとき、また「男の子を加えてくださいますように」と言って、彼の名をヨセフと名づけました。そして確かに生まれたのですが、それはラバンの家から故郷に戻ってくる旅をしていて、ベツレヘムに行く道でのことでした。難産でその苦しみの中で死んでしまったのです。その子がベニヤミンです。つまり、ラケルが泣いているというのは、このラケルの苦しみ、子と別れなければいけないという悲しみを表しています。「ラマ」は、エルサレムの北にある町ですが、バビロンがユダの民を捕え移す時にまずラマに連れて行き、そこからバビロンに移しました。そこでイスラエルの子らがバビロンに引かれていくその悲しみを、母が子を失う悲しみになぞらえているのです。

ところで、この箇所をマタイは、ベツレヘムの男の赤ちゃんが殺された時のことで引用しています(2:18)。このエレミヤ書の文脈の中では、バビロン捕囚の悲しみを話しているのですが、聖霊の導きによってマタイは、イエスを殺そうとしたヘロデ大王が、ベツレヘムの子らを殺した時の母の悲しみに当てはめているのです。

そして主がラマでの嘆きを覚えておられました。それで、必ず敵の国にいる彼らを戻すことによって、その労苦を報われると約束してくださっています。将来は、新しいエルサレムにおいて、労苦を取りのいてくださることを主は約束されています。「黙示録 21:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

31:18 わたしは、エフライムが嘆いているのを確かに聞いた。『あなたが私を懲らしめられたので、くびきに慣れない子牛のように、私は懲らしめを受けました。私を帰らせてください。そうすれば、帰ります。主よ。あなたは私の神だからです。31:19 私は、そむいたあとで、悔い、悟って後、ももを打ちました。私は恥を見、はずかしめを受けました。私の若いころのそしりを負っているからです。』と。31:20 エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。…主の御告げ。…

エフライム、すなわちイスラエルが自分たちの犯した罪によって懲らしめを受けていることを告白しています。自分はこのように背いたので、悔いているのです、と主の前でへりくだり、悔いていません。そこで主が、ご自分のはらわたがわななくほどに、彼らを憐れんでおられます。エフライムは、ご自分の子であったのです。大事な子であり、喜びの子なのです。懲らしめられたのは、彼らが憎いからではなく、むしろ愛しておられるからです。親は子を懲らしめる時に、自分がその痛みを受けるよりも、もっと痛むとよく言われますが、主の心はそうでありました。そして、イエス様の心もこのようなものであったでしょう。宣教の働きをされている時に、「マタイ 9:36 群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた。」

31:21 あなたは自分のために標柱を立て、道しるべを置き、あなたの歩んだ道の大路に心を留めよ。おとめイスラエルよ。帰れ。これら、あなたの町々に帰れ。31:22 裏切り娘よ。いつまで迷い歩くのか。主は、この国に、一つの新しい事を創造される。ひとりの女がひとりの男を抱こう。」

捕えられていくときに、標柱を立て、道しるべを置きなさいと命じていますが、理由は、後で戻ってくる時の道しるべとなるように、ということです。だから捕え移されるのですが、戻ってくるという希望をもって捕え移されなさい、ということです。そして「ひとりの女」とはイスラエルのことです。では「ひとりの男」は誰なのか？もちろん、神でありキリストご自身です。イスラエルが主のみを神とし、キリストを自分の王とします。

このようにして、主は懲らしめの後に、真実な親密ある交わりをしたいと願われています。真実な愛が回復します。これは聖餐においても同じです。自分自身をさばきなさい、吟味しなさいとパウロは勧めています。そして、癒しを得るのです。黙示録 3 章に、主がご自分の愛する者を懲らしめると言われています。そして悔い改める者には、食事を共にすると言われました。「3:19-20 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わた

しは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」